Japanese Association for Religious Studies

「世界を宗教的に見る」という観念について

飯田篤司

宗教の独自性を語るレトリックとして、伝統的に宗教における私秘的な内的経験の特殊性が強調されることが多かったが、その研究上の困難と問題も指摘されてきた。二十世紀にはそれに代わり、人間の世界経験を介在する言語的契機が前景化し、ここに「世界を宗教的に見る（経験する／解釈する）」という問題系が成立していく。それは内的な私秘的領域に閉塞した宗教の存立様相を、言語的な公共性へ開放していく意義をも担った。

このような宗教的世界観の特殊性を支える言語的契機には、「言語的概念枠モデル」のみならず、「言語的ファクターモデル」も挙げることができよう。前者は狭義の言語相対主義とも言え、近代に現出した宗教の多元的光景を前に、近代西欧とは異質な、非西欧世界の精神性・心性・世界観を支える言語的枠組みとその自律的な価値に焦点を当てるものである。それに対して後者は狭義の宗教言語とも言え、近代における文化的な多元的言説状況の中で、日常的・科学的世界経験とは異質な、通常の字義的意味を超過する非字義的な象徴などの言語契機に依拠するものである。両者とも、日常言語使用や科学的言語使用には回収されない独自の宗教的真理や意味を語る宗教的言語契機という理念に基づくものであり、世界経験の本質的な媒介としての言語の働きゆえに、外部からの批判を原理的に免れた領域を確保するという意味においては共通の構制にある。さらにその前提には、「鏡の比喩」（R. Rorty）の下に知識の十全性を証しようとする認識論的問題設定の下、「無組織の所与としての内容／経験を組織化する図式」という二元論の存在も指摘されよう。

言語による文化相対性という発想は、言語を「思考の鋳型」と喩えたサピア＝ウォーフ仮説に象徴されるよう、二十世紀半ばまでには、言語学のみならず文化人類学や関連諸分野においても広く流布し、一時代的な思潮をなしていった。しかし人間の知覚、認知、行動までをも規制するような言語決定論は、その後の方法論的批判と実証主義的研究の蓄積の過程で斥けられ、次第に単なる言語間における「関心の違い」にまで逓減していく。

さらには理論的水位においても、D・デイヴィッドソンらによって言語概念枠モデルには批判が寄せられている。〈概念／内容〉〈言語／現実〉といった伝統的二元構制自体を「経験主義の第三のドグマ」を放棄する時、もはや「言語的な境界」とは、越境が許されない倫理的境界を意味するものではもはやなくなっていく。

この時また、独自の宗教的体験を支える言語的ファクターも同様に全体論的な相の下にとらえ返され、「宗教独自の真理性」という理念自体も問われ、そしてシンボルやメタファーもその秘教的な色彩を薄めていくこととなる。デイヴィッドソンでは、字義的意味とは異なる象徴的意味の存在自体が否定され、比喩の意義は比喩表現の使用法にあるとされる。こうした脱神

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

秘化された象徴論・宗教言語論を宗教研究に敷衍する試みも、N・フランケンベリーやH・ペンナーらによってなされている。

今日なお、「世界を宗教的に見る」ことは可能であり現実でもある。ただ、それは「宗教的関心を持って世界を見る」こと以上を意味しないのであれば、他者からの「介入」を原理的に阻むものでもなく、また、言語的に支えられる内的同一性を保証するものでもない。ただ、これは言語という支えを喪失した「宗教の揺らぎ」を意味するものでもない。それは一方では、グローバル化社会がすでに不可避の現実となった現在、言語相対主義的な相互不可侵的な「倫理」を超え、他者への寛容と尊重の念を持って共に共生を目指す宗教の在り方、そして他方では、他の文化領域から隔絶された自閉的な宗教の自画像を超え、時代の中で絶えず生成していく創造的な宗教像を描く希望をも意味するものであろう。

クリアーヌの思想における反ソヴィエト的「宗教」

奥山史亮

本発表は、社会主義国家ルーマニアを亡命した宗教学者であるヨアン・ペトル・クリアーヌにとって、宗教が普遍的な広がりを有する（有するべき）と論じることはソヴィエトやルーマニアの社会主義政権が創り出す文化価値に抗する目的を有していたのではないかという仮説を提示する。そして、この仮説の妥当性を検討するために、亡命者組織の機関誌に掲載されたクリアーヌの政治的論説の内容を整理し、宗教理論と照らし合わせる作業を行なう。クリアーヌは、一九八九年一二月のチャウシェスク政権の崩壊から一九九一年五月の死までの期間、およそ三〇編の論説を発表して、「革命」がチャウシェスク政権内のクーデターであったことや「革命」へのソヴィエトの関与などを主張した。「死者たちの対話」は一九九〇年六月に『自由なる世界』に掲載された論説であり、革命後に政権を掌握した救国戦線のリーダー、イオン・イリエスクと処刑されたニコラエ・チャウシェスクの亡霊がKGBの仲介によって対談を行なうという形式で書かれている。この対談では、イリエスク率いる暫定政権はソヴィエトからの支援のもとチャウシェスク体制を忠実に継承していることが強調されている。さらに、一九九〇年九月に『自由なる世界』に掲載された「空想科学政治」には、ソヴィエトやルーマニアの政治動向についてのクリアーヌの見解がSF的な論調によって示されている。クリアーヌによれば、KGBの長であるユーリ・アンドロポフは、政治上の問題に関して、ありとあらゆる選択肢と、その選択肢が導き出す結果とを瞬時に示すことができるというスーパーコンピューターによって、社会主義が状況によってどのように展開するのかについての実験を行なった。その実験に使われた場所が、ルーマニアやハンガリー、ポーランドといったソヴィエトの衛星国家であった。アンドロポフは、社会主義体制がしかれたそれぞれの衛星国家を平行世界とみなした。そして、それぞれの傀儡政権に対して、スーパーコンピューターの選択肢にそって異な

NII-Electronic Library Service